

高槻市山岳地域の伝統文化活用計画検討委員会 議事概要

第1回

日 時 平成22年12月2日 10時～12時
場 所 高槻現代劇場 集会室202号

(主な意見)

持続的なプロジェクトにするため“市民のムーブメント”としての盛り上げが大切

- ・財源が限られる中、コストレスに盛り上げ、市民全体のムーブメントにするためには、ITを活用して参加型のコミュニケーションツールを用意する等により、高槻市の新・旧住民が教え合う交流ができれば良い。
- ・具体的には、皆が電子地図等に情報を書き込める市民参加型GIS等で地域の文化財について学びあう等が考えられる。

プロジェクトのニックネームやメッセージ性など、プロモーション戦略が大切

- ・プロジェクトのニックネームを市民に定着させて、概念が浸透すると、活動が盛り上がり、結果として文化財が活用されることになる。プロモーション戦略は非常に重要。
- ・自己満足ではなく、全国他地域の人が食いつくようなメッセージも必要。

伝統文化の情報は膨大かつ細かいので、情報整理には工夫が必要

- ・文化財等、人文社会の情報は膨大で細かいため、今回の調査で対象地域の文化財を時間軸・空間軸の2軸で捉え、情報整理しておくことで、その後市民が参加しやすくなる。

活動を継続するためには経済スキームを盛り込むことが必要

- ・子どものための活動は素晴らしいが、どこかで経済スキームを作っていないと、現在のノートの活動を継続させることも難しくなるかもしれない。
- ・地域にもお金を落とす仕組みを作らないと、国からの支援がなくなって困ることになる。

「ここでしかできない」プロジェクトにするため「寒天」等地域資源を活用したビジネスモデルにつなげることを検討すべき

- ・具体的にビジネスモデルを作るとすれば、対象地区が発祥の寒天が一番の地域資源。
- ・寒天から食に派生して、地域の寺で精進料理を提供し、ダイエット等売りとしてOLなどを集客するという一連の流れをビジネスモデルにできるかと思う。食育にもなる。
- ・寒天作りなどの段階から食品になる流れを一気通貫で、1年間のワンパッケージにする戦法や、寒天作りには多大な熱量が必要なため、対象地区で豊富な森林資源を、木質バイオマスとして活用する事業を実施すること等も考えられる。

次につながることを想定した調査進行を

- ・ヒアリング調査等を行うと、地域の方にアクションへの期待を抱かせることになる。今後のアクションにつながるような聞き方をすべき。例えば、今後のビジネス展開を狙いながら、伝統行事と食文化に絞って徹底的に調査する、モニタリング調査に段階性を持たせるなどの仕掛けが考えられる。

高槻市山岳地域の伝統文化活用計画検討委員会 議事概要

第2回

日 時 平成23年2月5日 16時～18時
場 所 原公民館（旧清水小学校分校）

（主な意見）

文化財や地域に対する理解度を深めるための仕掛けを検討する余地はある

- ・ 時間に余裕があれば、本日のプログラムに、子どもたちが写真を地図に落とし込むような作業を組み込むと、子どもたちの各場所などに関する理解も深まるのではないか。
- ・ 例えば地域の老人が色々な知識を持っていることが重要であったりする。子どもたちがそういった方々に出会うことは、教える老人、教えられる子どもの両方にとって良い。

参加者の子どもがスタッフになる流れをシステム化することが活動の広がりとなる

- ・ 大人が子どもたちに教えるより、子どもたちより少し上の世代である高校生、大学生が教えることで、子どもにとっての敷居は低くなっているかと思う。
- ・ 子ども時代に世話をしてもらった高校生、大学生が子どもの世話をする形で参加するという一連の仕組みが面白い。この仕組みを誰でも汎用できるシステムにできれば他の地域でもそのシステムを使うことができるようになるため、活動に広がりが出る。
- ・ システム化する際に大事になるのはクオリティコントロールである。

ブランドづくりとコミュニティ活性化を両立するため、継続性を持った取り組みを

- ・ 住民の方々には、外部の人々が来ることを有り難くないという人もおり、住民の方々が、地域外の人々が活動している状態に慣れる必要がある。
- ・ ノートの収益部門として検討中の“(仮称)里山カフェ”は、地元産の野菜等を地域ブランドとして販売、飲食として提供する場ができ、地域の方にどんどん参加してもらえ、仕組みづくりがあれば、地域から見ても存在意義のあるものになる。
- ・ ブランドづくりとコミュニティ活性化が重要な視点。両立に向けては、特にブランドづくりにおいて事業のクオリティを高めるための工夫や人材が必要になるため、中途半端にならないようにしなければならない。
- ・ 平成30年頃には、新名神道路のインタージャンクションが開通し、地域に人の動きが出てくる。このタイミングに向けて、農村の良さを生かしたコミュニティビジネスを作っていくことは、地域が結束する意味でも大切なことかと思う。ぜひ成功してほしい。

収益事業“(仮称)里山カフェ”を成功させるために

- ・ 今後、高槻でこのような取組を始める人々の足かせにならないよう、必ず成功してほしい。はじめから色んなことに取り組むのは無理なので、核になる事業をつくり、しっかりと事業の収支計算をした上で実験的に着手し、その後広げていくと良い。
- ・ 農村部で小さなビジネスをやるときの鉄則は、最初から本格的にオープンさせず、遊び半分で実験しながら始めることである。
- ・ ホームページで情報を発信していくと口コミで広がっていくのでファンを増やしていくと良い。店をオープンさせた時既にファンがついている状態を目指すべき。

高槻市山岳地域の伝統文化活用計画検討委員会 議事概要

第3回

日 時 平成23年3月5日 15時半～17時半
場 所 高槻センター街ビル会議室

(主な意見)

次年度以降は総合学習の一つのモデルを開発すべき

- ・ 今後の取り組み方向としては、総合学習の一つのモデルを開発すべき。また、検討だけで終わらせないため、教育委員会を巻き込むための仕掛けや定量的な見せ方が必要。定量的な見せ方としてはプログラムの活発度（児童の発言量等）を指標とするとよい。
- ・ ノートの実績は、子どもを対象に活動してきたということである。一方で、学校現場では総合学習がうまく出来ずに困っている。よって、ノハラボたかつきが総合学習のモデルを開発し、学校の総合学習の空白を埋めるだけでも大成功になると思う。

総合学習モデルの開発過程が、生涯学習プログラムへと広がる道筋になり得る

- ・ 本年度の調査をベースに開発したプログラムを質的に向上させていくためには、地域の多様な人材、地域の資源が豊かに絡み合うことが必要である。また、これによりプログラムの量も増えていく。このプログラムを開発する過程そのものが、生涯学習に広げていく道筋になるとすれば、面白いかと思う。
- ・ 子どもに対するプログラムも、子どもが自分以外の誰かに教えて広がるのが目的・着地点であり、まちのみんなが先生になるということが最終目的になればよい。そのためのサロンが前回委員会で事務局が提案された収益事業“里山カフェ”であるということになれば全てがリンクする。

関係機関がかかわりやすくなるような地域ポータルサイトの運営が必要

- ・ この委員会がノハラボたかつきのウェブサイト地域ポータルサイトとして運営し、関係機関の“入会地”を作ることにより、行政の関わりやすい形を作る。
- ・ ノハラボたかつきで今後検討する総合学習モデルの発想は、「シブヤ大学」と近いので、せっかくポータルサイトを立ち上げるのであれば、「大学」という名前を入れておけば、情報をつなげられるかもしれない。

総合学習モデルをビジネス展開することは可能

- ・ 総合学習モデルをビジネス展開することは可能。例えば、教育委員会と包括協定を組んで課金の仕組みを作る事例もある。モデルの効果と安心・安全性の見せ方等、営業ツールとしてどう見せるかが重要である。
- ・ まちのみんなが先生であるという状態がゴールであり、それを了解せざるを得ないようなプログラムができれば、学校現場の先生方も学校外に出て行く意識が芽生える。
- ・ 子どもから何かを引き出すことが学習になっていくが、地域の方が引き出した方がよりリアリティがある。ただ、地域の方は話すことが専門ではないため、地域の方との中間に入って話を引き出す人がいれば、もっと魅力を引き出せる。ノートが総合学習としてプログラムを展開する中で、人材を強化すれば、質を上げることが出来るかと思う。